

「水路」

わたしは夫が水路の近くで見かけたわたしによく似た女に興味をいだく。ある晩女の姿を目にした夫とわたしは後を追いかける。途中老人がふたりを引き留め、水路に落ちた男の話をする。女は水路から逸れた古びたアパートに住んでいる。わたしがひとりで再び女のアパートを訪ねた晩、女はアパートを探し出してやって来た夫から暴力を受けている。わたしは女のアパートに上がり込むが、女の傷ついた姿が過去の自分と重なり、怖くなつて逃げ出すようにその場を離れる。

ある日わたしの住むマンションに女がやって来る。夫からの暴力はまだ続いているらしい。女と一緒に夕食を食べソファで眠る。夫とわたしは眠る女を見守る。女はわたしのマンションに身を隠すことになり、女とわたしと夫の三人の共同生活が始まる。女は夜中弁当工場に出かけて朝方帰ってくる。女が体調を崩してから女と入れ替わるようにわたしが弁当工場に通う。わたしは女のアパートで眠ったりもする。

しばらくして女は新しいアパートを見つけ、マンションを出て行く。ある日水路の前に人だかりがしている。誰かが落ちたのだ。引き上げられた女はあの女に似ている。